

# 「W・E・B・デュボイスにおける人種と階級」

竹 本 友 子

はじめに

今日のいわゆる「黒人問題」が人種と階級の関係を中心に論じられていることは周知の事実であるが、これは決して新しい観点ではない。とくに一九二九年に始まった大恐慌が黒人の生活に深刻な打撃を与えていた一九三〇年代には、この二つの要素をめぐって黒人指導者層の間で激しい論議が戦わされたのである。そしてその中心に位置した一人がW・E・B・デュボイス (William E. B. Du Bois)<sup>(1)</sup>であった。

デュボイスはすでに第一次大戦の頃には、資本主義が白人の先進国による有色人種の支配と抑圧の上に発展し、今や帝国主義段階に達した、という認識をもっていた。したがって黒人の解放という課題を考えた場合、資本主義を否定する方向、すなわち社会主義の方向に向かうのは、彼にとってむしろ自然なことであった。しかしながら、一九一一年から一年ほどの社会党への入党体験を含めて、初

期のデュボイスの社会主義への態度は一貫性を欠いた曖昧なものであった。<sup>(2)</sup>

それが第一次大戦後になると、一九二六年の最初のソ連訪問やマルクスの本格的な研究を経て、しだいに社会主義への関わりを深めていく。そして大恐慌により黒人の経済的状況が一段と悪化した三〇年代は、デュボイスの関心が人種から階級へと変化し、「社会主義への決定的な移行」が起こった時期であるとする研究者が少なくない。<sup>(3)</sup>

デュボイスはこの時期、黒人の協同組合の結成を通じて経済的自立をはかろうとした、いわゆる「自主的分離」(self-segregation)構想を主要な争点として、所属する全国黒人向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People、以下、NAACPと略記する)の幹部との対立を深め、結果的に同組織を離脱することになる。その一方でアトランタ大学に戻って翌年の三五年には、再建史研究史上無視できない不朽の業績である『アメリカにおける黒人の再建』(Black Reconstruction in America, 1935、以下、『黒人の

「再建」または「再建」と略記する<sup>(4)</sup>を世に送り出す。しかし「自主的分離」構想にせよ「再建」にせよ、当時すでに大きな反響と論争を引き起こしたばかりでなく、今日においてもデュボイスを論ずる際に議論的となることが多い。そしてそれらは、当時のデュボイスの社会主義への傾斜よりは、むしろ彼の思想形成の初期から顕著にあらわれているブラック・ナショナリズム (black nationalism) をより強く反映しているとする見方も有力である<sup>(5)</sup>。

ドレイクはデュボイスの「知的発展を細分化」することは「不毛」であり、彼が「統合主義者」「ナショナリスト」あるいは「社会主義者」そのもの<sup>(6)</sup>であったことはないと述べている。しかし三〇年代のデュボイスにブラック・ナショナリスト的傾向と社会主義への傾斜の両方が混在するならば、それが彼の思想においてどのよう<sup>(7)</sup>に位置づけられていたのか、言いかえるならばこの時期のデュボイスにおける人種と階級の関係が問われなければならないであろう。また、デュボイスの他のすべての活動がそうであるように、黒人の状況改善のための現実的なプログラムとしての「自主的分離」と歴史研究としての「再建」は、活動の領域こそ違え、内容的には密接に関連したものである。というよりも「再建」に示されたデュボイスの認識が「自主的分離」の前提になっていると考えてよい。

本稿では「黒人の再建」と「自主的分離」構想の内容を分析することによって両者の関連を示し、その問題点を明らかにした上で、人種と階級の問題がデュボイスの内部でどのように位置づけられて

いたのかを考察したい。

# 一

デュボイスは「再建」の巻頭に置かれた「読者へ」と題する一文の中で、本書は一八六〇年から八〇年までの南北戦争及び再建の歴史を「とくに黒人自身の努力と体験に重きをおいて」解釈しようとしたものである、と述べている<sup>(8)</sup>。しかし、このような試みはこの時がはじめてではない。すでに一九〇九年のアメリカ歴史学協会年次大会で報告をまとめた「再建とその利点」という論文で、デュボイスは共和党支配下での南部の再建政府に浴びせられてきた数々の非難を論駁し、公教育制度をはじめとする再建政府の残した業績を明らかにしようとした<sup>(9)</sup>。

新たに書かれた「再建」においても、この姿勢はそのまま維持されている。デュボイスは本書の最終章で、従来の再建史家たちが「南部を逃れられない運命の殉教者として描き、北部を寛大な解放者とし、黒人を全体的な事態の展開の中での信じがたい冗談として嘲笑するために」、事実を歪曲したり無視することによって誤った再建像を広めてきたことを告発しているが、本書のきわめて多くの部分がこの問題に割かれている<sup>(10)</sup>。

たとえば再建政府は無知・無能な黒人によって操られ、税金の乱費と夥しい不正、汚職にまみれていたとする通説に対し、デュボイ

スは総論においても、また各州ごとの状況の詳細な描写においても、浴びせられた非難の不当性と黒人の功績を明らかにしていく。すなわち、財政上の失敗のゆえとされる莫大な負債に関しては、従来指摘されてきたほどの額ではないこと、黒人に政治の実権がなかった州でも同様の事態が起こったこと、政治腐敗や汚職はこの時期の合衆国全体に見られた現象であって、黒人のみに帰せられないことが主張されている<sup>(10)</sup>。そして、多くの困難にもかかわらず再建政府が南部における公教育制度の確立に中心的な役割を果たしたこと、またこの時期に制定された法律の多くがその後も長期にわたって存続しうる内容をもっていたことが述べられ、全体として再建政府に高い評価が与えられている<sup>(11)</sup>。

黒人の役割が評価されているのは再建期だけではない。デュボイスはリンカンの解放宣言後、南部において多くの奴隷がプランテーションを離れて連邦軍に加わった事実注目し、「これらの黒人は労働者や兵士として北部の勝利を可能にしたのであり、彼らの現実の援助と援助の見込みがなかったら、南部は決して降伏しなかったであろう」と指摘している<sup>(12)</sup>。

デュボイスは、歴史家は「自身の願望や欲求、信念に全くなかわりなく、事実を明らかにしなければならない」として、「プロバガンダ」としての歴史を否定しているが、「黒人が無能であるという神話の反駁」として、『黒人の再建』はまぎれもなくプロバガンダの役割をも果たしたのであり、同時代の黒人に高く評価されたのも

このブラック・ナショナリスト的側面であった。<sup>(13)</sup>

## 二

『再建』を貫くブラック・ナショナリズムは、四半世紀前に書かれた『再建とその利点』からそのまま受け継がれたものであるが、この前作との大きな相違として、『再建』が終始一貫して経済的観点によつて書かれていることがあげられる。すなわち、南北戦争の勃発を二つの異なる経済制度の衝突と見ることから始まって、再建の終了に至るまでのおのの出来事の因果的説明において、経済的要因が何よりも重視されているのである。黒人の解放を可能にしたのは、南部白人のあまりの保守的な態度に自己の利害を脅かされる不安を感じた北部産業資本が「奴隷制廃止—デモクラシー派」(abolition-democracy)に歩み寄った結果であり、再建を崩壊させたのも、人種的要因というよりは経済的圧力であった<sup>(14)</sup>。そして再建の失敗はアメリカにおけるデモクラシーの失敗を意味すると同時に「資本家の独裁」(dictatorship of capital)を出現させ、それは「世界中の有色人労働者」を従属させる「産業帝国主義」へと発展していくのである<sup>(15)</sup>。

このような経済的説明において、デュボイスはマルクス主義の用語や枠組みを多用しているのであるが、この点に関しては『黒人の再建』刊行当時から現在に至るまで否定的な評価の方が多く、複数

の研究者によって「さまざまな矛盾とマルクスの学説の不適切な使用」が指摘されている。<sup>(16)</sup>

たとえば「プロレタリアート」という用語の概念規定が曖昧であること、多くの奴隷がプランテーションから逃亡して連邦軍に加わった行為を「ゼネスト」(General Strike)と表現しているが、奴隷たちは「彼らを抑圧していたシステムから脱出しようとしていた」だけであって、「政治的目的」をもっていたわけではないし、「主人と何らかの交渉」を行おうとしていたわけではないことから、これは不適切であること、同様に連邦軍の占領下で南部に出現した事態を「労働者の独裁」(dictatorship of labor)と呼ぶことへの疑問などである。<sup>(17)</sup>

なかでも最も問題となるのは、本来自己の階級的利害を自覚し、団結して資本の側と対抗すべき労働者の内部における人種的対立・分裂を強調したために、再建の過程を「階級闘争の実践」として提示することに失敗していることである。<sup>(18)</sup>

アンテ・ベラム期において、プア・ホワイトは自らの階級的利害に反して黒人よりもプランターと自己を同一視し、奴隷制に向けるべき「あらゆる嫌悪や憎悪」を黒人に向けた。再建期においても白人有産階級が労働者の支持を得る目的で人種的偏見を煽ったため、「労働者を団結させ、階級意識をもたせることは不可能」になり、労働運動の指導者は「しだいにブチブル化し、黒人労働者に背を向けた」。その結果、合衆国の白人労働者と黒人労働者は、「事実上同

一の利害をもちながら、互いにきわめて根深く執拗に憎みあい、恐れあい、またどちらにも共通の利害を見出せないほど遠く離れたままにいる」点で、世界に類をみない存在となっている、とデュボイスは主張している。<sup>(19)</sup>

しかしながら、マルクス主義の用語や公式に関して『黒人の再建』に見られる混乱は、デュボイスの理解不足ばかりではなく、そもそも彼がアメリカの人種問題をマルクスによって説明しきれるとは考えていなかったことによる。

デュボイスは、自分は「共産主義者ではなかったし、今もそうではない」と断言しつつも、下部構造としての経済が上部構造を規定すること、人類の歴史が階級闘争の歴史であったことを示した点で、マルクスを「現代の最も偉大な人間の一人」と呼ぶ。<sup>(20)</sup> しかしながら、同時に彼はマルクスの限界をも指摘する。「マルクス主義哲学はいくつかの論理的難点を伴いつつも、一九世紀中葉のヨーロッパの状況についての正しい診断であった。しかしアメリカ合衆国、とりわけ黒人集団に関しては、それは修正されねばならない。」それは「彼がここアメリカで黒人の特殊な人種問題を直接には研究しなかったという事実」のゆえであった。<sup>(21)</sup>

『再建』の意義について、ウォーカーは次のように述べている。「経済に焦点を当てることで、デュボイスは人種問題をより幅広い文脈、すなわち一九世紀における有色人種に対する資本の勝利という文脈の中に位置づけた。そうすることによって彼はアメリカ例外

主義の考え方を崩り崩した。デュボイスの見解によれば、再建期におけるアメリカ黒人の従属は、白人が黒や茶色や黄色の皮膚をもつ人々を支配するようになる世界規模の過程の一部分であった。それゆえ合衆国の「人種問題」は、道德的あるいは倫理的な失敗ではなかった。それは社会の構造的進化と世界経済システム内部の発展にとつて重要なものであった。経済をアメリカの人種関係を形成する根本的な力として強調することによって、デュボイスは先人たちと袂を分かつた。<sup>(22)</sup>

これは一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、デュボイスがマルクス主義を本格的に研究した成果といえる。しかしながらデュボイスにとつて、合衆国の人種問題は階級問題の解決によつて解消されるようなものではなかった。普遍的理論であるべきマルクス主義は、この問題に関してはきわめて限定的にしか機能しなかった。その結果、経済的過程としての再建の説明は、多くの矛盾に満ちた、曖昧さを含むものにならざるをえなかったのである。

### 三

『再建』の曖昧さは他にも見られる。デュボイスは南北戦争から再建の過程を説明するにあたって経済的要因を強調したが、他の要因をまったく排除してしまったわけではない。デュボイスが言うところの南部における「労働者の独裁」は、一方ではチャールズ・サ

ムナー (Charles Sumner) やサデュース・ステイーンヴンズ (Thaddeus Stevens) に代表される理想主義に支えられていたが、それを可能にしたのは経済的動機に従う北部産業資本の「不道德なエゴイズム」であった。したがって真のデモクラシーの実現に向けての再建は、あらかじめ大きな矛盾を内包していたわけであり、その意味ではデマコーが言うように失敗を運命づけられていたと言える。<sup>(23)</sup>

これはデュボイスが再建を仮借のない合理性に貫かれた経済的過程として解釈しようとする一方で、デモクラシーの実現を目指しながら、それに失敗した過程としても描いていることによる。歴史の解釈、あるいはそれ以外の問題においても合理的要因と非合理的要因の混在が見られることは、デュボイスの初期からの特徴であり、マルクス主義の影響を受けたこの時期においても基本的には変化しなかったといえる。

さらにこれと関連して黒人の評価に関する曖昧さがある。すでに述べたように、デュボイスは南北戦争から再建に至る過程において黒人大衆が果たした役割を高く評価している。白人労働者の黒人に対する一貫した敵意を強調し、彼らを労働者としての階級的自覚に欠けた存在として描いているのに対して、奴隷のプランテーションからの逃亡、連邦軍への参加を「ゼネスト」とし、彼らが労働者としての自覚をもって行動したことを主張しているのである。

しかしながら他方でデュボイスは、再建政府が各州において最終

的に覆されていたことの原因の一端を、白人のみでなく黒人をも含めた「指導者の無知と悪徳」に求めている。<sup>(24)</sup> 北部産業資本の経済的利害に基づく協力の上に成立した南部の「労働者の独裁」は、「聡明で私心のないリーダーシップと明らかな理想を備えていれば、南部社会の経済的基盤を再構築し、財産を没収、分配して人民大衆のための真の産業のデモクラシーを築くことができたであろう」。そしてその後「労働者の独裁」に取って替わった「資本家の独裁」も、労働者の意向をある程度尊重せざるをえなかったところから、「断固たる目的意識をもったリーダーシップがあれば、労働の側は資本の力をかなりの程度削減でき、資本家の独裁が労働者の独裁に屈せざるをえなくなる時、すなわち産業の目的として一般の福利が個人的な利益に取って替わるような決定的な時を引き寄せることができたであろう」とデュボイスは主張する。<sup>(25)</sup>

だが現実には、白人はもとより黒人の指導者たちでさえこのような資質を欠いていた。デュボイスは、黒人の指導層は「白人のように富を求めるブチブル」から「黒人を向上させ、白人と対等にしようとする理想主義者たち」に至るまで多様であったとしているが、「労働者階級を権力の座へと成長させ、現代の産業国家を統御するための明確なプランをもっている者は、ほとんどいなかった」と言う。<sup>(26)</sup> デュボイスは再建期、とりわけ一八七三年の恐慌に体制変革の契機を見ていたが、それはきわめて有能かつ道徳的で目的意識をもったリーダーシップの存在を不可欠の前提としたものであった。

#### 四

一九二九年の秋、株価の暴落に端を発した大恐慌は、ただでさえ苦しい黒人大衆の生活に一段と深刻な打撃を与えることになった。三〇年代に入るとデュボイスは、機関誌『クライシス』(The Crisis)の編集主幹としての立場からNAACPに対し、黒人の危機的状况を打開するためにはこれまでのような人種差別反対闘争のみでなく、「黒人の間の経済的組織」の形成という、より積極的な経済的プログラムに取り組む必要があることを訴えるようになる。さらにこの問題と絡めた形でNAACPの組織の変革をも主張するようになり、事務局長のウォルター・ホワイト(Walter White)ら幹部との対立を深めていくのである。<sup>(27)</sup>

一九三四年に入ると黒人の協同組合結成による「自主的分離」という自身のプログラムをより熱心に主張するようになるが、人種分離を肯定するデュボイスへの反発は大きく、支持の輪は広がらなかった。そしてこの年の五月、ついにNAACP理事会は分離の原則的否定を表明するとともに、『クライシス』は協会の機関誌であり、協会のいかなる有給役員も『クライシス』誌上において、協会の方針、業務、役員の批判をしてはならない」ことを決議した。これを受けてデュボイスは辞表を提出し、四半世紀の間活動の拠点としてきたNAACPを去ることとなる。<sup>(28)</sup>

デュボイスのN.A.A.C.P.脱退の契機となった「自主的分離」構想とはどのようなものであり、どのような思想に基づいていたのだろうか。それについては当時の『クライシス』やその他の雑誌に掲載されたデュボイスのいくつかの論考で断片的に述べられているほか、N.A.A.C.P.脱退の翌年にアレン・ロック (Allan Locke) の依頼を受けて書かれた「黒人と社会的再建」(『The Negro and Social Reconstruction』, 1936) および一九四〇年の自伝的作品『暁の薄明』(『Dusk of Dawn』, 1940) において比較的まとまった形で説明されている。以下、この二作を中心に他の論説も加えてデュボイスの構想を紹介してみたい。<sup>(29)</sup>

デュボイスによれば、黒人の立場が弱いのは「解放以来十分な経済的基盤をもったことがなかった」ためである。しかし生産者としては確立した地位にない黒人も、消費者としては潜在的に「巨大な経済力」をもっているのであるから、これを基盤にして経済的に団結すれば「彼ら自身の集団内に協同組合的国家を組織する」ことが可能である。そして「黒人の農民に黒人職人の食料を供給させ、黒人の技術者に黒人の住宅産業を指導させ、黒人の思想家にこの協同事業の統合を計画させる一方で、黒人の芸術家にこの闘争をドラマ化させ、美化させることによって、経済的独立が達成されうる」と、デュボイスは言う。<sup>(30)</sup>

デュボイスにとって、このような構想はまったく新しいものではなかった。デマールコによれば、黒人の経済的協力へのデュボイスの

関心は前世紀に遡るといふ。そして『クライシス』の編集者になった頃には、すでに人種隔離の現実を逆手にとる形で経済的団結を訴えている。さらに第一次大戦の頃にはある程度具体的な提案を行っているのである。<sup>(31)</sup>したがって大恐慌を背景にしているとはいえず、三〇年代のこの「自主的分離構想」は、黒人のさし迫った危機に対処するためのたんなる応急的措置ではなく、長年の熟慮に基づいた計画であり、将来への展望を含んだものであった。

恐慌は確かに黒人をさらなる経済的苦境に追い込むものであったが、デュボイスはこれを「経済における一つの時代の終わり」、「資本主義の崩壊」を表すものとして、「われわれの経済的方法に根本的な変革をもたらす」またとない好機と積極的に捉えている。<sup>(32)</sup>それは南北戦争後の再建が果たせなかった課題でもあった。

黒人の置かれている現状を打破するための方策としてはいくつかの選択肢が考えられるが、デュボイスはそれを一つ一つ検討し、批判を加えている。まずデュボイス自身が長年にわたって加わってきたN.A.A.C.P.を中心とする差別撤廃の運動であるが、これはかなりの成果をあげているものの、「それにもかかわらず人種偏見の障壁は世界中で確かに一九三〇年においても一九一〇年と同じくらい強力であり、見方によってはいくつかの側面において、より強力である」。<sup>(33)</sup>したがって「この仕事はもちろん続行させねばならない」が、これだけでは不十分である。

連邦政府のニューディール政策による救済はどうか。これも仕事

の割当て等をめぐって「黒人は白人隣人の善意に完全に依存しなくてはならず、世論がまれに好意的な場合を除けば、救済が黒人の所へやってくるのは他のすべての人々に行き渡った後であり、仕事が黒人に与えられるのは他のすべての人々が職についた後である。そして彼の賃金は最低の水準に留められるであろう」<sup>(34)</sup>。

では労働運動はどうか。デュボイスは「白人労働者と黒人労働者の間の亀裂は、白人の労働者と資本家の間のそれよりも大きい」と主張する。そして今日「黒人から投票権を奪い、黒人の教育を否定し、黒人の労働組合への加入を阻止し、黒人をまずまずの住宅や地域から追い出」すのは白人労働者である、と指摘する。<sup>(35)</sup>

マラブルによれば、すでに一九二〇年代には「クライシス」の「最も頻繁な攻撃目標」は組織労働の人種差別主義であった。デュボイスは活動の初期には人種的偏見は無知に由来するものであり、科学的な啓蒙活動によって取り除くことができると信じていたが、この頃には偏見の非合理性を認識し、その近い将来における消滅についてほとんど悲観的になっていたのである。<sup>(36)</sup>

最後に既成左翼の運動についてはどうか。デュボイスは「現在の急進的で革命的なプログラムは、黒人を解放する論理と力の両方を欠いている」と断言する。デュボイスはそもそも社会変革の手段としての「暴力革命」を受け入れることはできなかったし、白人労働者の黒人に対する偏見、敵意を考えれば階級的連帯は不可能であるとして、マルクス流の革命が当時のアメリカで起こる可能性を信じ

ることはできなかった。<sup>(37)</sup> とりわけアメリカ共産党に対してデュボイスは徹底的な不信任感をもっており、彼らはアメリカの人種問題の特殊性を理解せず、スコッツボロ事件に見られるように、黒人を「突撃専用部隊」(Shock troops)として利用しているにすぎない、と批判している。<sup>(38)</sup>

こうしてデュボイスにとっては、既存の手段のどれもが黒人の救済という目的のためには不十分なものであり、人種の団結のみがこれに適うものであった。「究極的に世界中の労働者を解放するのは、階級意識をもって団結した労働者である。究極的に有色人を解放するのは、自身の制度と運動において協力しあう人種意識をもった黒人であり、アメリカの黒人にとって今日前進するための偉大な一歩は、自主的な断固とした協同組合の努力を通じて経済的解放をなし遂げることである」。<sup>(39)</sup>

## 五

デュボイスの「自主的分離」構想への激しい反発は、これまで黒人の運動がその撤廃に向けて努力してきた「分離」を肯定し、そこから出発していることによる。デュボイス自身、「……この計画が提起されるとたちまち年長の黒人たちの間に大きな不安が広がった。彼らは「分離反対、これ以上偏見と人種分離に屈するな」と叫んでいる」と述べている。デュボイスによれば確かに合衆国の黒人の間



には「分離」がすでに根づいており、黒人の多くは「分離された教会や学校」に通い、「分離された地区」に住んでいた。結婚は「ほとんどわれわれ自身の集団内で」行われ、社会的活動も「われわれ自身の」ものであった。このような分離の大半は「無用なばかりでなく有害」であるが、「すぐにはなくならないだろう」し、むしろ近い将来にわたって増加するだろう、とデュボイスは予測する。<sup>(40)</sup>

デュボイスのプログラムがこのような現状をふまえたものであることは事実であるが、それはたんなる現状の追認ではなく、分離をより肯定的に捉えるところから始まる。合衆国では常に分離が差別につながってきたが、もともとこの二つは別のものであり、「分離が差別を含まないかぎり、たんなる分離に反対する必要はない」と、デュボイスは主張する。それは「過去四半世紀にわたって、有色人の向上は主として彼ら自身のみで彼ら自身のために働くという方向でなされてきた」のであり、それによって大きな成果が達成されているからである。とりわけ黒人の組織化による自助が成功しているのは教会、学校、小売業等の分野であった。<sup>(41)</sup>

とはいえ、デュボイスは分離の拡大や恒久化を望んでいたわけではもちろんない。究極の目標は「アメリカにおける完全な黒人の権利と平等」である。そして経済的な組織化によって「強力で効率的な一二〇万人の集団」をつくることができれば、「いかなる敵対的な集団も連帯や平等を拒み続けることはできない」から、結局は分離を消滅させる方向に向かうであろう、と主張する。<sup>(42)</sup> したがって

従来の分離や差別反対の運動とこの「自主的分離」は究極的な目的を同じくするものであって、どちらも並行させていかなければならない、とデュボイスは言う。黒人の状況を改善する有効な方策が見出せない、いわば「手詰まり」の状況において、「自主的分離」はその現状から出発する現実的な計画であり、より長期的な目標を達成するための闘いを可能にしてくれる経済的基盤をつくる手段として位置づけられるものであった。<sup>(43)</sup>

しかしながら、デュボイスにとって「自主的分離」は黒人の団結、自助努力による向上という、あの一九世紀以来のブラック・ナショナリズムのたんなる復活ではない。それは明確に社会主義への志向をもったものであった。黒人の自助努力による経済的自立といえはデュボイスの論敵であったブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington) を連想するが、デュボイスによればワシントンの望んだものは「雇用とより高い賃金の機会を拡大することによって、黒人にとってよりよい経済的状况を確保」することであった。だがそれは黒人大衆を「搾取」し、白人資本家に統合されてしまう黒人資本家をつくりだすだけであり、いわば黒人内部の階層分化を促進する結果に終わってしまう。<sup>(44)</sup>

デュボイスの計画の要点は生産ではなく消費を機軸にしたところであった。もちろんこれは目下のところ黒人の潜在的経済力がもっぱら消費者としてのそれであるという現実的な条件によるものであるが、それと同時に消費者としての立場から出発することによつ

て、資本主義の営利的システムを越えることができるかと考えたことによる。<sup>(45)</sup>

デュボイスによれば黒人の協同組合的システムはすでにある程度実現されているという。しかしそれがめざましい成功をおさめていないのは、組織化が不十分であることに加えて、私的利益を追求しているからだと分析する。そして彼はそのような態度の「完全な変革」を主張する。すなわちデュボイスの提起する黒人の協同システムは生産者の私的利益ではなく、消費者の必要と要望に基づいて組織される非営利的システムでなければならず、「生産コストを越えたすべての利益」は消費者に還元されることになるのであった。これによって「百万長者や金持ちの黒人さえも」いなくなるであろうが、同時に「貧民や産業からの落伍者」も姿を消し、誰もがつつましいけれども必要を満たすだけの賃金を得られる、失業者のいない社会ができるはずであった。<sup>(46)</sup>

しかしながらこのような主張に含まれる楽観主義を別にしても、デュボイスの「自主的分離」の計画には致命的ともいえる弱点があった。デュボイス自身、この計画の困難を自覚していたが、「訓練を積んだ正直な人々の注意深い計画があれば」成功するだろうと述べている。すなわちこの計画には、私心がなく、かつ計画化に長けた指導者が不可欠であった。黒人内に明確な階級対立が存在しないことを前提にしたこのような考え方は、たとえばジョージ・ストリーター (George Streater) の「投資や利益に関しては、黒人が彼

の人種を愛するなどということはありません」という痛烈な批判を招くことになった。<sup>(47)</sup> デュボイスは黒人の間にも「聖職者、教師、農場所有者、専門職の人々、小売業者からなるブチブルが成長しつつある」ことを認めている。そして教育を受けたこれらの人々が「アメリカの黒人と労働者階級全般の利害に真向から対立する反動的な資本主義的思考様式」に染まっていることにも気づいていた。したがってこれらの人々の中から協同組合運動の指導者を見出すことの困難は認めていたが、それでもデュボイスは「私は若い黒人指導者のすべてが利己的で愚かな搾取者というわけではないという事実を頼みにしています。この階級の最良の部分から指導者を得るか、そうでなければ何も得られないかのどちらかです」と述べ、黒人指導者の倫理というきわめて不確かなものを自身のプログラムの最終的な拠り所にしていたのである。<sup>(48)</sup>

### おわりに

一九三〇年代のデュボイスの思想を代表する『黒人の再建』と黒人の「自主的分離」構想は、一方は歴史学的著作であり、他方は黒人の境遇を改善するための現実的プログラムであるために、同列に論じられないことは言うまでもない。しかし両者はほぼ同時期にデュボイスによって生み出されたのであり、非常に多くの要素が共通して存在することはこれまで見てきた通りである。いま一度それ

を整理すれば、ブラック・ナショナリズム、経済の重視、社会主義への志向、白人労働者階級への強い不信任感、指導者の倫理的・道德的要素の重視等があげられよう。

デュボイスは南北戦争後の再建の過程を、合衆国に真のデモクラシーを実現するための実験と捉えた。しかしその実験は失敗した。直接的には大恐慌下の黒人を救済するためのプログラムである「自主的分離」構想は、半世紀以上前に果たされなかった課題であるデモクラシーの実現、経済的平等をめざしたものであった。

マルクス主義を知ったことがデュボイスの視野を拡大し、アメリカの人種問題という特殊なものをより幅広い世界的なコンテクストに位置づけることを可能にしたことは疑いのない事実である。しかしデュボイスはあくまでアメリカの黒人の現状から出発し、その理解と解決に役立つ範囲でしかマルクスを受け入れなかった。

デュボイスが「自主的分離」構想の成否を黒人中産階級の私心のない有能なリーダーシップに託したのは、彼の思想の特徴をよくあらわしている。一九三〇年代後半から四〇年代にかけて合衆国が日本との対立をしいに深め、ついには戦争に突入していく過程で、デュボイスは日本の行動に好意的な立場をとった。これは同じ有色人としての連帯感に基づくものである。しかし、日本が同じアジア人国家である中国において侵略的行動を繰り返していることについても、それは両者の人種的同一性からいって、本来起こりうるはずのないことであり、やがては両者が深い絆で結びつくことを期待し

て日本を厳しく批判することを避けた。<sup>(49)</sup>

人種の内部の利害の対立よりも人種の連帯をア・プリオリに仮定するデュボイスのこのような特徴が、「自主的分離」構想にも見て取れる。彼は黒人内部の階級対立の現実に気づきつつ、それでもなお人種としての連帯感に期待した。この態度はデュボイスが労働者内部の黒人と白人の乖離を一貫して強調し、これを矯正不可能としたこととあわせて考えるならば、デュボイスの思想をその最も深いところで規定していたものはあくまで階級ではなく人種であったというべきであろう。

しかしながら、階級的連帯よりも人種の連帯を優位においたデュボイスの期待は、その後ごとに裏切られることになる。合衆国の黒人の階層分化とブチブル化は明白な事実となって彼の眼前にあらわれてくるのである。第二次大戦後、デュボイスがしだいに第三世界、とりわけアフリカに関心を深めていくのは偶然ではない。いまだ階層分化が進展せず、黒人の原始的な共同体精神が残存していると考えられたアフリカに、デュボイスは社会主義の実現を期待するようになるのである。

#### 註

- (1) John B. Kirby, *Black Americans in the Roosevelt Era: Liberalism and Race* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1982), pp. 188-189.
- (2) Joseph P. DeMarco, *The Social Thought of W. E. B. Du Bois* (Lanham: University Press of America, 1983), pp. 82-83.

- (c) Willie A. Drake, "From Reform to Communism: The Intellectual Development of W. E. B. Du Bois" (Ph. D. Dissertation, Cornell University, 1985), pp. 144-145, 161.
- (4) William E. B. Du Bois, *Black Reconstruction in America: An Essay Toward a History Of the Part Which Black Folk Played in the Attempt To Reconstruct Democracy In America, 1860-1880* (1935; rpt., Millwood, N. Y.: Kraus-Thomson Organization Ltd., 1976). 以下、BRと略記する。
- (5) Clarence E. Walker, *Deromanticizing Black History: Critical Essays and Reappraisals* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991), pp. 76-77. 横山良「大恐慌期における黒人市民権運動—NAACPと経済的平等—」今津晃、横山良、紀平英作編『市民的自由の探究—兩大戦間のアメリカ—』(世界思想社、一九八五年)所収、一三四—一三五頁。例外的なS. William D. Wright, "The Socialist Analysis of W. E. B. Du Bois" (Ph. D. Dissertation, State University of New York at Buffalo, 1985), p. 471.
- (6) Drake, *op. cit.*, p. 143.
- (7) Du Bois, BR, "To The Reader."
- (8) Du Bois, "Reconstruction and Its Benefits," *American Historical Review*, 15 (July, 1910).
- (9) Du Bois, BR, p. 723.
- (10) *Ibid.*, pp. 613-18.
- (11) *Ibid.*, pp. 664, 597-98.
- (12) *Ibid.*, p. 238.
- (13) *Ibid.*, pp. 722, 714; Walker, *op. cit.*, p. 76; August Meier and Elliott Rudwick, *Black History and Historical Professions, 1915-1980* (Urbana: University of Illinois Press, 1986), pp. 101-102.
- (14) Du Bois, BR, pp. 185, 622, 693.
- (15) *Ibid.*, p. 630.
- (16) De Marco, *op. cit.*, p. 107.
- (17) Walker, *op. cit.*, p. 83; De Marco, *op. cit.*, p. 120.
- (18) Walker, *op. cit.*, p. 83.
- (19) Du Bois, BR, pp. 12, 680, 357-358, 700.
- (20) Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept* (1940), in Nathan Huggins, ed., *Writings* (New York: Library Classics of the United States, Inc., 1986), p. 775; "Marxism and The Negro Problem," *The Crisis* 40 (May, 1933), p. 103.
- (21) Du Bois, "Marxism and The Negro Problem," p. 104; "Karl Marx and The Negro," *The Crisis* 40 (March, 1933), p. 56.
- (22) Walker, *op. cit.*, p. 86.
- (23) De Marco, *op. cit.*, p. 117.
- (24) Du Bois, BR, p. 484.
- (25) *Ibid.*, pp. 580, 605-606.
- (26) *Ibid.*, p. 612.
- (27) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 770; Manning Marable, W. E. B. Du Bois: *Black Radical Democrat* (Boston: Twayne, 1986), pp. 139-40; この標題は「ソビエト」ではなく横山良の前掲論文が語らる。
- (28) Marable, *op. cit.*, p. 141.
- (29) "The Negro and Social Reconstruction" は、編集者の意向を受け入れて書き直されたが、結局内容の過激なゆえに当時は刊行されず、一九八五年の「ソビエト」の田中良彦、Herbert Aptheker, ed., *Against Racism: Unpublished Essays, Papers, Addresses, 1871-1961* (1985; Pap. ed., Amherst: University of Massachusetts Press, 1988), pp. 103-104.
- (30) Du Bois, "A Negro Nation Within the Nation," *Current History* 42 (June, 1935), pp. 266, 269-270; "The Negro and Social Reconstruction," p. 146.
- (31) De Marco, *op. cit.*, pp. 139, 144-45, 148-49. 横山「前掲論文」一三四頁。
- (32) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 699; "Marxism and The Negro Problem," p.

- 103.
- (33) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 761; "The Negro and Social Reconstruction," p. 146.
- (34) Du Bois, "The Negro and Social Reconstruction," p. 143.
- (35) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 704; "Marxism and The Negro Problem," p. 104.
- (36) Marable, *op. cit.*, p. 126; Du Bois to George Sreator, April 17, 1935, in Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W. E. B. Du Bois*, Vol. II (Amherst: University of Massachusetts Press, 1976), p. 87. 以下『Correspondence』と略記する。
- (37) Du Bois, "The Negro and Social Reconstruction," p. 143; Du Bois to Sreator, April 24, 1935, in *Correspondence*, p. 92; Du Bois, "Marxism and The Negro Problem," p. 118.
- (38) Du Bois, *Dusk of Dawn*, pp. 704, 771-72; Du Bois to Sreator, April 24, 1935, in *Correspondence*, p. 92.
- (39) Du Bois, "Segregation," *The Crisis* 41 (January, 1934), p. 20.
- (40) Du Bois, "The Negro and Social Reconstruction," pp. 150, 144-145.
- (41) Du Bois, "Segregation," p. 20; "A Negro Nation Within the Nation," p. 270.
- (42) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 700; "The Negro and Social Reconstruction," p. 150.
- (43) Du Bois, "The Negro and Social Reconstruction," pp. 154-155, 156.
- (44) Du Bois, *Dusk of Dawn*, p. 703; "The Negro and Social Reconstruction," p. 149.
- (45) 一九二〇年代、北部の都市の黒人コミュニティでは、彼らの消費者としての購買力の増大を背景に、これを武器として白人雇用主に対して黒人の雇用促進を要求していく運動が行われ、ある程度の成功をおさめていた。デューボイスのプログラムとは目的も性格も異なるものであり、彼がこの運

動を念頭に置いていたかどうかは不明であるが、少なくとも、彼が前提とした黒人の消費者としての力が無視できないものになっていたことは確認できる。樋口映美『アメリカ黒人と北部産業―戦間期における人種意識の形成―』（彩流社、一九九七年）一六一―一六三頁。

- (46) Du Bois, "The Negro and Social Reconstruction," p. 151; *Dusk of Dawn*, p. 711.
- (47) Du Bois to Sreator, April 17, 1935, in *Correspondence*, p. 87; Sreator to Du Bois, April 8, 1935, *ibid.*, p. 90.
- (48) Du Bois, "Marxism and The Negro Problem," p. 104; "The Negro and Social Reconstruction," p. 152; Du Bois to Sreator, April 17, 1935, in *Correspondence*, p. 87.
- (49) この問題に関しては、拙稿「W・E・B・デューボイスと日本」『史苑』五四巻二号（一九九四年三月）七九―九六頁参照。

〔付記〕本稿は、一九九六年度早稲田大学特定課題研究「W・E・B・デューボイス研究」の研究成果の一部である。